

# 野口雨情と石井鶴三

## ——信州大学蔵石井鶴三関連資料から——

吉田 恵理 (立教大学)

### はじめに

本稿は、信州大学蔵石井鶴三関連資料から発見された四通の石井鶴三宛野口雨情書簡について報告するものである。

野口雨情(一八八二「明治二五」～一九四五「昭和二〇」)は民謡、童謡、歌謡の創作、とりわけ「兎のダンス」「シャボン玉」「七つの子」などの童謡で知られる詩人であり、北原白秋、西条八十と並んで大正期の近代童謡の基礎を固めた人物とされている。「北原白秋の「りす りす 小栗鼠」にはじまる日本の近代童謡の中で、一ばん日本的な色彩と響きで大衆の中にあざやかな足跡を残した」、「民謡の土台の上に成長した独特な童謡」という藤田圭雄の評は、雨情の作風と文学史的な位置づけとを端的に言い表している。<sup>1)</sup>童謡「七つの子」の原形が明治四〇年に刊行された民謡集『朝花夜花』の「山鳥」に認められるように、雨情の童謡と民謡は緩やかに繋がっている。民謡というより歌謡や小唄と呼ぶに相応しい作品もある。雨情自身が自らの民謡集の序で宣言したように、雨情の詩は「郷土詩であり、土の自然詩」であり、「心読の詩ではない、耳の詩」であった。<sup>2)</sup>

さて、野口雨情と石井鶴三の接点についてであるが、今回発見さ

れた資料以外に互いの存在に触れる資料は見当たらず、野口雨情の作品に石井鶴三が挿絵を提供した等の事実も、二人がいつどのような経緯で相知ることとなったのかも詳らかでない。ただし、雨情が創作した膨大な数の童謡や民謡は現在すべてが網羅されているわけではなく、野口雨情に関する基盤的な研究自体がまだ十分でない状況がある。

今回の書簡資料四点のうち、消印から製作年次が判明している二点はいずれも昭和四年のものである。詳細は後述するが、製作時期が不明の書簡については差出人住所から大正一三年以降のものとして推定される。

『赤い鳥』にはじまる大正期の童謡童話運動の興盛の中で雨情は童謡作家としての大きな存在感を示すことになるが、それ以前には「民謡作家としてわずかに名を知られていただけの田舎詩人」<sup>3)</sup>であった。転機となったのは大正一〇年、民謡「船頭小唄」(制作は大正七年)が中山晋平によって作曲され、一二年三月、栗島すみ子、岩田祐吉主演の松竹映画の主題歌となって全国に流布し、雨情は民謡作家としても広く名を知られるようになる。大正後期、民謡・童謡界の第一人者としての地位を確立した雨情は、数多くの雑誌に作品や評論を発表しながら、童謡と新民謡運動の中心人物として日本各地をまわり、講演と創作に多忙を極めていた。

だが、全国各地で同人誌が発行されて百花繚乱といった風であった童謡童話雑誌界も、大正の終わりから昭和初頭に退潮の兆しを見せ始め、昭和四年には『赤い鳥』も雨情を擁した『金の星』も終刊となっている。したがって、本稿で紹介する石井鶴三宛書簡四通は、雨情がその地位をすでに確立していた童謡最盛期から、その時期を過ぎた後の頃のものとということになる。

### 石井鶴三宛野口雨情書簡（四通）

①石井鶴三宛野口雨情書簡 仮番号【書2—231】

拝啓

御筆硯益々御清廻

奉大慶候

御多忙中甚恐入り候へ

共拙著童謡十講「及び随筆集武蔵野村より 左傍挿入」の

御装禎を是非御願ひ

仕り度達崎龍君御

伺ひ度候間御面会いた、

き度御願申上候 拝具

二月二日

野口雨情

石井賢台

侍史

宛名は「石井鶴三様」、差出人は「金の星社 野口雨情」。差出人

住所不明、切手と消印なし。直接持参されたものとも考えられる。二行目「廻」は誤字で正しくは「迪」。

注目されるのは本書簡が「金の星社」の社員としての雨情から鶴三に宛てられた依頼状であること、またその内容が雨情の講演録『童謡十講』の装幀の依頼であることだ。

『金の船』は、『赤い鳥』創刊の翌年の大正八年一月に創刊され、大正十一年六月以降『金の星』に改題される。このとき発行所もキンツノ社から金の星社となった（ただし、大正十一年六月から昭和三年二月までは金の星社の『金の星』と越山堂の『金の船』が併存した）。本誌は主宰者である齋藤佐次郎、初代編集長となる雨情のほか、岡本帰一らの画家、中山晋平、本居長世らの作曲家を擁した児童芸雑誌である。雨情は『金の船』創刊の翌年から童謡欄の選者となり、大正九年六月からキンツノ社編集部勤務のため水戸より上京している。差出人に「金の星社」とあることから、本書簡製作時期の上限は大正十一年六月とみて間違いないだろう。

『達崎龍君』は『金の船』および『金の星』編集部で雨情と仕事を共にし、童謡を発表していた達崎龍一の筆名である。達崎自身の回想記によれば、「生まれてはじめて投書した童謡が、野口雨情先生推薦となり、岡本帰一画伯の挿絵がついて一頁大で『金の船』に掲載された。びっくりして、ある雨の日に友人と二人でお宅をお訪ねしたのが先生の知遇を得た最初」で、雨情の口利きで編集部に入社することとなった人物である。<sup>4</sup>

『童謡十講』（金の星出版部）は大正十二年三月に刊行となっているから、「二月二日」という製作日付だけが判明している本書簡の製作年次は「金の星社」設立以後の大正十二年と推測される。ただ書簡が大正十二年のものであるとする推測が正しければ、発行が奥

付の通りでなかったとしても依頼から出版までのスピードが早すぎる。なお、現在確認できる『童謡十講』の装幀は石井鶴三によるものではない。また「随筆集武蔵野村より」に該当する出版物も確認できない。

達崎の回想にもあるように、『金の船』『金の星』と言えば岡本帰一や寺内萬治郎といった画家による童画が表紙や挿絵を飾った雑誌である。彼らの画風が雑誌の性格に与えた影響は大きく、雨情の童謡のイメージ形成にも深く関わっていたはずだ。雨情の仕事と画家の関わりを確認しておけば、最初の童謡集『十五夜お月さん』（尚文堂、大正一〇年八月）は岡本帰一の表紙画と挿画入りである。また、童謡集『青い眼の人形』（金の星社、大正一三年六月）は装幀を藤谷虹児、口絵を寺内萬治郎が手掛けている。さらに昭和二年一月、雨情作詞・寺内萬治郎画「童謡いろはかるた」を『金の船』新年号付録として発行、雨情作詞・岡本帰一画「童謡かるた」を普久社より出版している。そのほかに、大正一四年に出版された『雨情民謡百篇』（新潮社）の装幀は小川芋銭が手掛けており、エッセイ「小川芋銭先生と私」（『ちまき』昭和一二年六月）が古くからの交流を伝えているが、芋銭を除けば関わりが深いのは基本的に『金の船』『金の星』が擁していた画家である。

『童謡十講』はその序文の記すところによれば、「各府県の教育会に又は講習会に於ける講演の筆記」であり、同郷の農民作家である犬田卯が筆記した講演録である。すると、なぜ、どういう経緯で石井鶴三に、しかも童謡創作集ではなく『童謡十講』の装幀を依頼したのか、いよいよ謎は深まるが、雨情が童謡の作家としてだけでなく、講演や評論活動に熱心な運動家であり、この類の書を数多く出版していたことは押さえておくべきだろう。大正一二年だけで

も『童謡十講』のほか、七月に『童謡教育論』（米本書店）、十月に『童謡と児童教育』（イデア書院）を刊行している。この点については本稿の最後に改めて考察を加えたい。

## ②石井鶴三宛野口雨情書簡 仮番号【書2-230】

拝啓。今回児童

情操教育に関

する雑誌創刊

に付田中鈴木

両氏御願の件

之れあり参上、

御面会のほど御

願ひ申上げます。

拝具

野口雨情

石井兄

侍史

封筒の表書きは「石井鶴三様」、裏書きは「吉祥寺七七七 野口雨情」とある。消印なし。中身は依頼状である。

書簡四通のうち本書簡を含む三通の発送場所は「吉祥寺七七七」となっている。前節にも記したように雨情は大正九年に『金の船』の編集部勤務のため上京しているが、北多摩郡武蔵村吉祥寺七七七番地（現在の武蔵野市）に転居したのは関東大震災後の大正一三年、四十二歳の時である。ここで「童心居」と命名した書齋用の離れを

建築したことが知られている。その後昭和一九年に療養と疎開のために宇都宮へ転居するまで吉祥寺に住んでいた。

本書間の製作時期は不明であるが、雨情が吉祥寺に引越したのは大正一三年であるから、それ以降に書かれたものと思われる。この製作年次の上限にあわせて本書簡を二番目に配置した。

製作時期が特定できないことに加えて依頼の内容についても書簡の中には書かれておらず、「児童情操教育に関する雑誌創刊」が何を指すのかについては差し当たり大正一三年以降という点から可能な範囲で推測するほかない。

大正八年一月の『金の船』創刊以来昭和四年一月まで、雨情はキンノツノ社（のち金の星社）の社員として講演や朗読をして全国各地で童謡童話の同人誌が発行されている。藤田圭雄が『金の星』『金の船』の読書欄から同人誌発行を知らせる記事を抽出してまとめているが、その中には「野口雨情先生の賛助をいたゞき、童謡童話雑誌「アラムギ」を発刊いたします」とか、「野口雨情先生御賛助の童謡民謡雑誌「紫陽花」を皆様に御紹介致します」というように雨情を賛助員や顧問として迎える雑誌も数多く見える。<sup>5)</sup>

だが、『金の星』昭和二年二月号の「編輯室より」には、「さて、童謡童謡がこの頃になつて、何となく振るはなくなつたのは何としたことでしょうか。『金の星』と同種類の雑誌も一時は随分沢山ありましたが、今では本誌の外に僅かに『赤い鳥』と『金の船』があるばかりでしかもそれとても一時の元気がなくなつておます」とある。『金の星』は関東大震災以後円本合戦に参入して事業不振がいよいよ深刻化、昭和三年四月には編集も外部に移譲することとなる。誌名は『少年少女 金の星』と変更、大衆誌として翌年七月号まで刊行

され終刊となつている。<sup>6)</sup>

依頼は『金の星』を新しい形で存続させようとした折の助力を代表として請うものであったとも考えられるが、あるいはまったく別の雑誌の創刊のために雨情が一肌脱いだとも考えられる。

なお、『石井鶴三日記』第V巻の「石井鶴三・書誌・挿画・展覧会出品・年次目録」から該当する雑誌と作品を探したところ、昭和五年一二月に創刊された『児童時代』（童謡月刊社）の表紙画がある。この画は『石井鶴三全集』第四巻で確認することが出来るが、現在では入手困難な雑誌であり、雨情に関わりのある雑誌であるかどうかは不明である。

### ③石井鶴三宛野口雨情書簡 仮番号【書2—235】

拝啓。このたびは御多用中も不顧、御無理なことを御願ひ致しましたにも不拘、御快諾をいたゞき尚御手紙までも下されありますがたく御礼申し上げます。御手紙の趣きは直に百瀬氏に通知致しました故同氏より総て申上げることゝ存じますが、とりあへず私からも厚く

御礼申上げます。 拜具

十月三日

野口雨情

石井大兄

侍史

宛先は「府下板橋町中丸二六六／石井鶴三様」、消印の年月日は昭和四年一〇月三日である。差出人住所は「府下吉祥寺七八七」。

前の二通の書簡が石井鶴三からの反応があったかどうか不明だったのに対し、本書簡では雨情からの何らかの依頼を鶴三が承引したこと、この件で鶴三から手紙をもらっていることがわかる。依頼内容は【書2-230】と連続しているとすれば「児童情操教育に関する雑誌創刊」に関する事柄であるはずであるが、詳細は不明。なお、この時期に雨情が主宰として関わった雑誌に新民謡の作家、作曲家が集った『民謡音楽』（昭和四年一二月創刊）がある。

④ 石井鶴三宛野口雨情書簡 仮番号【書2-229】

拝啓。「昨夜は 右傍挿入」まことに失

礼を致しました。

歸りに御挨拶

を申上げやうと

おさがし致しま

したが、人こみの

ためお目にかゝれ

ずほいなく帰宅

致しました。

お気に召さぬやう

におほせられました

が、春雨も夕立も結

構に存じました。こと

に春雨の桜は一際結

構に存じました。同行の

城戸弁護士も激賞

されてをりました。どなた

が工夫されてもあれ以上の

「二字不明 ミセケチ」春景は出来ま

いと思ひました。拜具。

消印の年次がやや判読し難いが、昭和四年一月一日と読める。

封筒兼用のミニレターで、宛先は「板橋町中丸二六六 石井鶴三様

侍史」、差出人は「府下吉祥寺七八七 野口雨情」。

「昨夜はまことに失礼」とあるが、『石井鶴三日記』および『石井鶴三全集』に関連事項は見当たらなかった。「春雨」や「夕立」は文脈上鶴三の作品と考えられるが、どのような機会があったのかは不明である。なお、大正一三年『週間朝日』四月六月号の装画「春雨」があるが、これも関連するかどうかは不明。

ただし、「春雨」は雨情の号の由来に関わる題目でもある。「名士の雅号と其由来」（『現代』大正一五年四月）によれば、「支那古文にある「雲恨雨情」といふ詞からとつたのであります。この意味は、春降る雨の趣といふ、至つて雅な情味あるところになります。」とある。

## おわりに

童謡最盛期を過ぎた昭和初年代の雨情は、流行歌謡の作詞家として活躍し始めてもいた。『波浮の港』が昭和三年に佐藤千夜子、藤原義江と二種類のレコードとなり、翌年には西条八十の『東京行進曲』と裏表になった『紅屋の娘』が好評を博す。昭和三年八月に『野口雨情民謡叢書』（民謡詩人社）、四年七月に『波浮の港』（ビクター出版部）の刊行もあった。平輪光三はこの間の雨情について、「うたう童謡を主張した雨情は、漸次童謡の世界が、専ら読んで味う童謡へとその傾向が強くなつて来ると、専ら民謡、歌謡へ自然力をそそぐようになり、昭和四年雑誌「民謡音楽」を主宰することになったのである」とまとめている。<sup>9)</sup>

雨情の「うたう童謡」に相對する「読んで味う童謡」の代表格は北原白秋ということになるが、その対立構図からすれば、雨情は流行歌謡の作詞家という側面のみならず「児童雑誌の濫行、童謡、童曲集の頻々たる出版発行、童謡の独唱、合唱、和洋童謡舞踊の演奏興行、童謡レコードの発売、ラジオ放送と、次第に俗悪な流行に墮して」いく童謡ブームを先導した人物ということになりもする。「童謡行脚」と称して全国各地を巡り歩いて講演したり、作曲家や歌手、舞踊家たちと連携し合つて童謡会を開催したりして、実践活動を通して自らの主唱する「正風童謡」を普及、定着させた功績は大きい<sup>8)</sup>という評価もあるが、一方で「野口雨情の仕事を考えてとき、その大衆性をどう算定するか、困難の存するところ」という見解も根強い<sup>9)</sup>。このことは、野口雨情研究にとつて、さらには文学研究における童謡・民謡研究にとつて大きな課題であり続けていると

言える。

これまで「うたう童謡」詩人・野口雨情と言えば、『金の船』『金の星』が擁した作曲家である本居長世、中山晋平らとの交流や、志賀志邦人、権堂円立、藤井清水ら関西音楽家のグループ「楽浪団」との生涯に亘る関係が注目されてきた。音楽文化としての雨情童謡の研究の発展が望まれることは言うまでもない。だが、先の「大衆性をどう算定するか」という見解に連なつて、楽曲の力に支えられて今なお愛唱される童謡とは別に、曲をつけられなかった「雨情本来の詩情あふれる珠玉の幾篇かが陰になっている」とする見方があつることに注目したい。<sup>10)</sup> こうした見方から、たとえば「蜀黍畑」や「十六角豆」等の詩篇が先行研究において「雨情童謡の極致」とされるのは、冒頭にも掲げた「郷土詩であり、土の自然詩」であるという雨情の詩観を反映しているからでもある。今回発見された書簡から、講演録『童謡十講』の装幀を石井鶴三に依頼していたことが明らかとなつたが、同書は「郷土童謡論」を収録し、「私の云ふ郷土童謡とは、田舎の童謡といふ意味ではなく、故郷の童謡といふ意味であります。要するに故郷の言葉で書かれた童謡が、即ち郷土童謡なのであります」と主張している。

さらに、「うたう童謡」と「読んで味う童謡」という対立構図は、今日の雑誌文化研究の知見から更新される必要があるだろう。特に『金の船』『金の星』等の児童文芸雑誌は、編集者、童謡詩人、画家、作曲家たちのネットワークとコラボレーションによって、さらにはそれを受容し創作を投稿する読者と選者との関係によって、次第にその性格が形作られていったのである。

【書2—231】の解題で言及したように、岡本帰一、寺内萬治

郎らの画風は、雑誌とともに雨情の童謡の性格形成にも影響を与えたはずである。『金の船』『金の星』の主宰である斎藤佐次郎は雑誌創刊の経緯を回想して、童謡詩人より先に「他誌を凌ぐ優れた画家を探さねば」と思い、『赤い鳥』の清水良雄や『おとぎの世界』の初山しげるに対抗しうる画家として岡本帰一を見出したことを明かしている。<sup>(1)</sup>

また上笙一郎は、「西欧的・近代市民社会的」なイラストを描く清水良雄を擁した『赤い鳥』、「村童を詩的に描く」川上四郎の『童話』と比較しつつ、その両極の中間として、「金の星」の児童出版美術は、いわゆる富裕階級に属する子どもたちではなくて、都市であれば旧中間層、農山漁村であればその社会的中流層に暮らす子どもたちの生活気分に対応するものであった」と指摘している。<sup>(2)</sup>これは、雨情、白秋、八十の童謡詩人としての作風を比較して一般に白秋と八十が「都会風、西洋風」、雨情は「郷土的農村的」と見られることが多いのに対し、<sup>(3)</sup>出版美術的な観点からすると別の見方が出来るということを示している。

これらの観点を踏まえてもし自由想像することが許されるなら、雨情が『童謡十講』の装幀を石井鶴三に依頼したのは、経緯は分からずとも岡本帰一とともにあった『金の船』『金の星』掲載童謡のイメージとは異なる形で、「郷土詩であり、土の自然詩」であるという自らの詩観に相応しい絵を描く画家として彼を選んだからではなかっただろうか。そのように想像してみると、冒頭に掲げた「心読の詩ではない、耳の詩」という雨情の言からは、音楽的でありつつ「うたう童謡」とも別の中間的な相、静かに耳をすますように受け取るべき、歌にならなかつた「土」の童謡を「読む」読者像がイメージされるのである。

## 注

- (1) 藤田圭雄『日本童謡史Ⅰ』あかね書房、昭和四六年一〇月
- (2) 『極楽とんぼ』「序文」黒潮社、大正一三年一月
- (3) 同(1)
- (4) 達崎龍一「腰ぎんちゃくの記」『みんなで書いた野口雨情伝』金の星社、昭和五七年一月(再版)
- (5) 同(1)
- (6) 「金の星社」ホームページ <https://www.kinnohoshi.co.jp/archive/> [令和元年一二月二〇日閲覧]
- (7) 平輪光三『近代作家研究叢書58 野口雨情』日本図書センター、昭和六二年一〇月
- (8) 槍田良枝「解題」『定本 野口雨情』第七巻、未来社、昭和六一年一月
- (9) 同(1)
- (10) 槍田良枝「金の船」「金の星」と野口雨情『雑誌「金の船」「金の星」復刻版別冊解説』ほるぷ出版、昭和五八年三月
- (11) 斎藤佐次郎「(4)「金の船」「金の星」の回顧」『雑誌「金の船」「金の星」復刻版別冊解説』ほるぷ出版、昭和五八年三月
- (12) 上笙一郎「金の船」「金の星」の児童出版美術——岡本帰一・寺内萬治郎そのほか『雑誌「金の船」「金の星」復刻版別冊解説』ほるぷ出版、昭和五八年三月
- (13) 古茂田信男「金の船」「金の星」と雨情『雑誌「金の船」「金の星」復刻版別冊解説』ほるぷ出版、昭和五八年三月

※野口雨情の本文はすべて『定本野口雨情』(未来社)に拠った。

※本稿で紹介した石井鶴三宛野口雨情書簡の翻字にあたっては、荒井真理亜氏・高野奈保氏・多田蔵人氏・出口智之氏・松本和也氏によって作成された書簡のデータベースを活用させて頂きました。謹んで謝意を申し上げます。

※本稿執筆後、信州大学附属図書館を通じて野口雨情記念館から野口雨情と石井鶴三の交友関係を示す資料について情報提供を頂いた。『童謡と童心芸術』（同文館、大正一四年七月）「第二章 童謡と教育」に、金の星社から吉祥寺の自宅への帰る途中の新宿駅で「旧友の石井鶴三氏」に偶然会って話をしたという挿話がある。短い挿話であるが、小川治平や坂本繁二郎といった美術関係の知人の名や、「ほんたうの日本の自然を見ることの出来る芸術家」をめぐるやり取りが記されている。本稿の論旨にも関わり、二人の関係の親しさを伝える重要な資料である。情報を提供して下さいた野口雨情記念館に謝意を申し上げます。